

N・ルーマンのコミュニケーション概念をめぐる

On N. Luhmann's Concept of Communication

永井 彰

Akira Nagai

1 はじめに

現代社会をとらえる社会理論は、いかなる道筋において構築されなければならないのか。この問いの解明をみずからの課題として引き受け、現代社会にかんする社会理論の構築に向けて精力的に取り組んでいる人物としてN・ルーマンとJ・ハーバマースの名をあげることに、誰も異論はないことと思われる。いうまでもなく、ルーマンとハーバマースとは、その依拠する理論的方法においても異なっているし、現実認識のあり方についてもその方向性を大きく異にしている。だが、そうしたスタンスの違いにもかかわらず、コミュニケーションへの着目という点においては、ルーマンとハーバマースとのあいだに重要な共通性をみだすことができる。ウェーバー＝パーソンズ流のこれまでの行為概念はいわば社会性を欠いたものであり、この行為概念から出発するかぎり現代社会をとらえる社会理論は構築しえない。この基本認識をルーマンとハーバマースとは共有している。しかも、ウェーバーやパーソンズが陥ったこうした隘路を避けるためには、行為からではなくコミュニケーションから出発すべきだということ、こうした共通した提案を、かれらはそれぞれのパースペクティブからおこなっている。そうしてみると、ルーマンもハーバマースも、社会理論の「コミュニケーション理論的転回」を提唱していることができる。

社会理論のコミュニケーション理論的転回を提唱するというこの点においては、ルーマンとハーバマースとはまさしく一致している。だが、じっさいにこの転回をどのような道筋においておしすすめるかという局面になると、かれらは別々の方向に進むことになる。そうだとすると、社会理論のコミュニケーション理論的転回をめぐるルーマ

ンとハーバマースとの共通点と相違点を明らかにすることこそが、現代社会にかんする社会理論のあり方を考察するうえで、重要な論点となるにちがいない。ここでは、ルーマンとハーバマースのそれぞれがめざす道筋について詳細に検討することはできないけれども、さしあたりその要点だけを確認しておくことにすると、まずハーバマースは、目的合理的行為を範型としたウェーバー＝パーソンズ流の行為概念にたいしてコミュニケーション行為の概念を提唱し、あくまでも行為理論の枠内でコミュニケーション理論的転回をおしすすめようとしている。この点においてハーバマースは、社会理論たりうる行為理論の構築をめざしているということに注目しておこう⁽¹⁾。それにたいしてルーマンは、自己準拠的システム理論の視角から行為とコミュニケーションとのかかわりを根底から洗いなおし、コミュニケーション過程こそが社会システムの基底的な過程であることを明らかにしようとしている⁽²⁾。社会理論のコミュニケーション理論的転回にみられるこうした方向性の違いこそが、ルーマンとハーバマースとのもっとも重要な理論的係争点の一つであるということが出来る。いわゆるハーバマース＝ルーマン論争をより実質的なものとして展開させるためには、こうした対立点をそれぞれの理論に内在して十分に解明しておく必要があるように思われる⁽³⁾。

そうした課題意識から、本稿ではそのための第一歩として、ルーマンのコミュニケーション概念について検討することにしたい。この検討をつうじて、社会理論のコミュニケーション理論的転回はどのようになされるべきかの問いにたいし、ルーマンがどのように答えようとしているのかを明らかにすることにしよう⁽⁴⁾。

ところで、ルーマンはコミュニケーション過程

こそが社会システムの基底的な過程であると主張している⁽⁵⁾。その意味において、社会システムを構成する最終的要素は行為ではなくコミュニケーションであるとみるべきだということになる。ルーマンは、社会システムの最終的要素を行為とするかコミュニケーションとするかはその社会理論にとって基本的な選択であることを強調し、こうした選択こそが、それにもとづいて構築される理論のスタイルを決定的に特徴づけることになる指摘している⁽⁶⁾。この文脈においてルーマンは、社会システムのもっとも基底的な過程がコミュニケーション過程であるとのべているのであり、そうしたところからここでのルーマンの主張は、いわば「行為からコミュニケーションへ」というテーゼとしていいあらわすことができる。ただ、この表現は誤解を招きかねないものでもあるので、後の論点を先取りしてここで若干の補足をおこなっておくことにしたい。というのも、ルーマンは行為概念そのものを無用のものとして社会システム理論から放逐してしまっているのでは決していないからである。ここでルーマンが反対しているのは、行為なるものをまず出発点に設定し、そうした行為のなかの特別なケースが社会的行為として取りあげられ、そうした社会的行為が組み立てられて社会が構成されるとする考え方だといえよう。つまりルーマンが批判しているのは、社会性というものを行為の特殊なケースや行為の特定の部分としてとらえる考え方なのであり、こうした考え方に依拠するかぎり社会性というものは適切にとらえられないとルーマンはみているのである⁽⁷⁾。行為なるものを出発点におくこうした考え方を否定するところにここでのルーマンのねらいがみいだされるのであり、社会理論のなかから行為概念を追放しようとしているわけでは決していない。後に見るように、社会システムを行為システムとしてとらえる見方は一面的ではあるけれども、決して誤りとはいえない、ともルーマンはのべている⁽⁸⁾。むしろルーマンの力点は、社会学のなかで通用してきたウェーバー＝パーソンズ流の行為概念を問いなおすところにあるとみななければならないのであり、ルーマンは、そうした根底的な問いなおしをふまえて、行為とコミュニケーションとのかわりに新たな視角から考察を加えていこうとして

いるということができる。

そうした確認をまずおこなったうえで、「行為からコミュニケーションへ」というテーゼに立ちかえてみると、このテーゼが成立しうるためには、コミュニケーションそのものが個々の行為には還元されえないということが示されなければならない。というのも、コミュニケーションもまた伝達という一種の行為にはほかならないとか、コミュニケーション過程は行為の連鎖としてとらえられるのだとかいった常識的なコミュニケーション把握にとどまるかぎり、いまあげたテーゼは結局のところ「行為から行為へ」というトートロジーに陥ってしまい、無意味なものとならざるをえないからである。したがって、ルーマンの主張が有意義なものとなるためには、コミュニケーションとは他者に何ごとかを伝達することだとする素朴なコミュニケーション観からの訣別が不可欠となる。この点において、ルーマンのコミュニケーション概念は、コミュニケーション観そのものの転換をめざしているということができる。

そこでまず、ルーマンのコミュニケーション概念の基本的な論理構造を検討し、コミュニケーションは個々の行為には還元されえない独自のリアリティであるとするルーマンの論理を確認することにしよう(第2節)。ついで、そうしたコミュニケーション概念からすると、行為とコミュニケーションとのかわりはどのようにとらえなおされるのかを検討することにしたい(第3節)。そして最後に、ハーバマースのコミュニケーション行為概念と対比させることによってルーマンのコミュニケーション概念の特徴をうきぼりにし、ハーバマース＝ルーマン論争とのかかわりにおいて今後検討されるべき論点について、確認しておくことにしよう(第4節)。

2 コミュニケーションの概念

ルーマンの基本的な考え方からすれば、社会システムは行為から構成されるのではなくコミュニケーションから構成されているのだという。こうしたルーマンの見解が首肯性を有するためには、コミュニケーションが行為には還元されえない独自のリアリティであることが示されなければならない。というのも、コミュニケーションとは伝達

行為のことであるとかコミュニケーションは行為の連鎖にはかならないとかいった通常のコミュニケーション把握にもとづくかぎり、コミュニケーションは結局のところ行為へと還元されてしまうことになり、社会システムは行為からではなくコミュニケーションから構成されとするルーマンの主張が、無意味なものとなってしまうからである。そうしてみると、まず第1に、コミュニケーション概念を解明して、コミュニケーションが行為には還元されえないことを示すことが不可欠となるし、第2には、そうしたコミュニケーション概念の解明によって開示された見地から、コミュニケーションと行為との関係がとらえなおされなければならないことになる。

ところで、ルーマンがコミュニケーション概念を解明していくにあたってまず批判の対象として取りあげているのが、コミュニケーションを「移転 (Übertragung)」というメタファーにおいてとらえる考え方、すなわちコミュニケーションとは送り手から受け手へとニュースないしは情報 (Information) を移転させることだとする考え方である。ルーマンからすれば、この移転というメタファーが用いられれば、コミュニケーションが一種の物体のやりとりのようにとらえられてしまい、コミュニケーションを実体論的に歪めてとらえてしまうことにつながる。それゆえ、このメタファーはコミュニケーションの現実相を把握するにはまったく役に立たないのだという⁽⁹⁾。じっさいのところこうした移転のメタファーは、コミュニケーションを把握するさいにごくふつうに用いられているのだけれども、ルーマンからすれば、こうしたいわば常識的なコミュニケーション観こそが問いなおされなければならないのである。

ルーマンによれば、移転メタファーにもとづくコミュニケーション把握には、次のような難点がみいだされる。まず第1に、このメタファーにしたがえば、送り手が何ものかを引き渡し、その何ものかを受け手が受け取るという印象が与えられる。しかし、このことからしてすでに事実には合致していない。というのも、送り手は何ものも失ってはならず、その意味においては何も手放してはいないからである⁽¹⁰⁾。たしかに物体を譲り渡すばあいには、送り手は何らかの物体をじっさいに

失い、その物体が受け手へと移転することになる。だが、そうしたばあいとは違って情報を伝達するばあいには、送り手はそのことにより、何も失ってはいない。情報はたしかに受け手へと伝えられるが、そのことによって送り手はその情報を失うわけでは決してなく、送り手はその情報を保持しつづけている。

第2に、移転のメタファーにしたがえば、コミュニケーションの根幹は移転の行為であり伝達 (Mitteilung) であることになる。しかしながら、ルーマンによれば、伝達というものはコミュニケーションの一部にすぎない。ルーマンからすれば、伝達は何らかの選択の提起以上の何ものでもありえない。こうした提起が受け止められこの刺激が処理されてはじめて、コミュニケーションは成立するのだという⁽¹¹⁾。

第3に、移転というメタファーは移転されるものの同一性を誇張している。このメタファーが用いられると、移転される情報が送り手と受け手の両者にとってあたかも同一であるかのように惑わされてしまう。もちろん同一であるということもありうるのだけれども、そうした同一性があらかじめ保証されているわけでは決してない。ある情報が送り手と受け手の両者にとって同一だというばあい、その同一性はコミュニケーション過程のなかではじめて構成されるのであり、ある情報が送り手と受け手の双方にとってきわめて異なったものを意味しているという事態も考えられうることを忘れてはならない。移転というメタファーは、こうした事態を覆い隠してしまうことにつながる⁽¹²⁾。

第4に、移転というメタファーにしたがえば、コミュニケーションとは、送り手が受け手に何ものかを伝達する二極的過程であるということになる。しかし、コミュニケーションを送り手と受け手からなる二極的過程としてとらえることそれじたいが疑わしいことである、とルーマンはいう⁽¹³⁾。後の議論を先取りしていえば、ルーマンは、情報、伝達および理解 (Verstehen) からなる三極的過程としてコミュニケーションをとらえるべきことを主張している。そうしたルーマンじしんのコミュニケーション把握については、すぐこの後で検討することにしよう。ともあれルーマン

によれば、移転メタファーにもとづくコミュニケーション把握には、いまのべた四つの問題点がはらまれているのであり、それゆえこうした常識的なコミュニケーション観から離れ、コミュニケーションというターミノロジーそれじたいを作りかえなければならないのだという。

それでは、ルーマンじしんはコミュニケーションをいったいどのようにとらえようとしているのだろうか。まずはじめにルーマンは、かれじしんの意味概念を前提にしながら、コミュニケーションというものがつねに選択的な出来事であるという点を強調する。ルーマンによれば、コミュニケーションは、そのときどきのじっさいの指示の地平のなかから何ごとかを選びだし、それ以外のものを無視しているのであり、そうしてみると、コミュニケーションとはこうした選択の処理のことにほかならないのだという⁽¹⁴⁾。ルーマンの表現を引用すれば、「コミュニケーションのなかで現実化される選択は、それじたいの地平を構成している。より詳しくいうなら、そうした選択は、そうした選択が選んでいるものをすでに選択として、すなわち情報として構成している」。「そうした選択が伝達するものは選びだされているばかりでなく、そうしたものじたいすでに選びだしであり、それゆえに伝達される」⁽¹⁵⁾のである。この表現にみられるルーマンの考え方を敷衍していえば、送り手による「伝達」や受け手による「理解」が世界のなかからの選択であるというまでもないが、そればかりでなく伝達されるものそれじたいもまた一つの選択なのであり、だからこそ「情報」として伝達されるのだということになる。しかもそうした情報それじたいの選択性は、送り手の伝達にも受け手の理解にも還元されえない。だからこそ、コミュニケーションは二極の選択過程ではなく三極の選択過程とみなされなければならないのだという⁽¹⁶⁾。そうしてみるとルーマンは、情報それじたいの選択性というものに着目し、それが送り手による伝達や受け手による理解には還元できないということを指摘することによって、移転メタファーにもとづく実体論的なコミュニケーション把握からすでに一步抜け出しているということができよう。ただしそのさい、コミュニケーションがたんに三つの選択からなるできごとだというので

はなく、伝達、情報および理解という三つの選択の総合からなる創発的なできごとであることが示されなければならない。というのも、このことが示されなければ、コミュニケーションもまたいくつかの選択の組みあわせだというにすぎず、コミュニケーションそのものの論理構造が十分に解明されたとはいえないからである。たしかにコミュニケーションが個々の行為に還元しきれないことは指摘されたけれども、ここでの記述ではたんに、情報それじたいの選択性が伝達や理解の選択性と並置されているにすぎない。もしルーマンの主張がそうしたレベルでの指摘にとどまるのであれば、従来のコミュニケーション把握から完全に脱却しえたとはいいきれないだろう。

いうまでもなくルーマンのねらいは、かれじしんの自己準拠的システム理論の視角から、コミュニケーションを根底的にとらえなおすところにあるとみなければならない。そこでルーマンの論述にしたがいながら、かれのコミュニケーション把握についてさらに検討を深めていくことにしたい。ルーマンによれば、コミュニケーション過程が成立しうる条件を考えると、次の三つの条件があげられるという⁽¹⁷⁾。まず第1に、情報それじたいが選択性を有しているということである。いうまでもなくコミュニケーションは、コミュニケートすることそれじたいを目的としておこなわれるばあいもありうるし、誰かといあわせている時に沈黙している気まずきを避け、ただ空白を埋めるためにおこなわれることも考えられる。たしかにこれらのばあい、伝達されていることがらを取りあげてみると、ニュースとしての価値は低いと考えられる。しかしそうであっても、情報としての選択性は存在しているのであり、そうした選択性がなければコミュニケーション過程は成立しえない。第2には、情報を伝達するという行動を誰かが選択しなければならないということがあげられる。そのさい、そうした行動は意図的であるばあいもありうるし、意図的ではないばあいも考えられうる。そして第3には、理解という選択は、情報とその伝達との区別に依拠することができる、ということである。ルーマンによれば、この第3の点こそがコミュニケーションの成立にとって決定的に重要である。

ルーマンによれば、伝達という選択とそうした伝達による情報という選択とをコミュニケーションの受け手が区別することができ、この二つの選択の差異を受け手じしんが取り扱うことができるということによってのみ、コミュニケーションは成立しうるのだという⁽¹⁸⁾。まずさしあたってこの差異は、送り手にたいする受け手の観察のなかにみいだされる。そうした観察によって受け手は、送り手による伝達行動そのものとそうした伝達行動によって伝達されるものとを区別することができる。他方、このように受け手によって観察されていることを送り手じしんが知っているばあい、送り手は情報と伝達行動との差異を受け入れ、こうした差異を利用してコミュニケーション過程を多少なりとも上首尾にコントロールしようとする。そうしてみると、送り手は、受け手による理解を予期し、そうした理解を利用して伝達をおこなっているわけであり、さらには理解が成立することによってコミュニケーションははじめてコミュニケーションたりうるということからして、コミュニケーションは、時間的にみていわば後の時点から、コミュニケーション過程の時間の経過とは逆向きに可能とされていることにもなる。こうしたルーマンの把握にもとづけば、コミュニケーションの成立にとって理解というものが不可欠の要因をなしているということになる。こうした分析からルーマンは、コミュニケーションは自己準拠的な過程 (selbstreferentieller Prozeß) としてのみ可能であるとするテーゼを導きだす⁽¹⁹⁾。

コミュニケーションが自己準拠的にのみ可能だというのは、いかなる事態のことを意味しているのだろうか。ルーマンによれば、相互行為参加者のあいだでコミュニケーションが次々と引き続いておこなわれているばあい、あるコミュニケーションにおいては、先行するコミュニケーションが理解されているかどうかということも、あわせて吟味されている。コミュニケーション過程のなかでのあるコミュニケーションについて取りあげてみると、送り手は、先行するコミュニケーションの理解に依拠しているということを示すためにこのコミュニケーションを利用しているし、受け手は、先行するコミュニケーションを相手が理解しているかどうかを観察するためにこのコミュニケ

ーションを利用している。そうしてみると、接続しておこなわれるコミュニケーションは、それじたいコミュニケーションであるばかりでなく、先行するコミュニケーションが理解されているかどうかを確認するテストでもある。いうまでもなく、そうしたテストによって理解されていないということが判明するばあいもありうるわけだが、そのような結果は、コミュニケーションについてのコミュニケーションすなわち再帰的コミュニケーションが引き起こされるきっかけとなっている。ともあれ、コミュニケーションが理解されているかどうかは、それに接続する行動においてはじめて点検されうる⁽²⁰⁾。こうした分析にしたがうなら、個々のコミュニケーションは、それに引き続いておこなわれるコミュニケーションとの接続連関において理解が可能であるということや、そうした接続連関のなかで理解が点検されるということをつうじて、保証されているのである⁽²¹⁾。ルーマンはこうした分析をふまえて、コミュニケーション過程が基底的自己準拠 (basale Selbstreferenz) の過程であることに注意をうながす。ルーマンによれば、ある過程は諸要素から成り立たなければならないのだが、その諸要素が、その同一の過程における他の諸要素を取り入れることによって当の諸要素それじたいと関連しているというばあい、そこには基底的自己準拠が成り立っているという⁽²²⁾。ルーマンは、理解というものを手がかりにしてコミュニケーションを検討することによって、コミュニケーション過程においてはまさしくこうした基底的自己準拠が成り立っているとする。

コミュニケーションが基底的自己準拠の過程であるということを明らかにすることによってはじめて、移転メタファーにもとづく実体論的なコミュニケーション把握は完全に払拭されたということが出来る。コミュニケーションの受け手は、情報と伝達の差異を考慮に入れて理解をおこなう。他方、コミュニケーションの送り手は、受け手が情報と伝達の差異を考慮に入れるであろうということに予期して、伝達をおこなう。まさしくこうした一連の過程のなかではじめて、コミュニケーションはコミュニケーションたりうる⁽²³⁾。ルーマンにいわせれば、コミュニケーションはこうした一連の過程のなかでとらえられることによっての

み分析されうるのであって、そうした過程のなかから伝達行動や理解だけを切り離して取りだすということじたい、無意味だということになるだろう。ふつうコミュニケーションを取りあげるばあい、まず送り手による伝達があり、それにたいして受け手による理解があるといったように考えられてしまいがちであり、つまりは伝達と理解の両者を別々に導入したうえでそれらに関係づけるといった発想法がとられてしまうことになる。しかし、ルーマンのコミュニケーション把握においては、こうした考え方それじたいが否定されている。こうしてみるとルーマンは、個々の行為が組み立てられてコミュニケーションが構成されるとする考え方そのものを否定しているものであり、コミュニケーションはコミュニケーション過程のなかでのみ分析されうるという視点を明示化しているといえよう。

3 コミュニケーションと行為

ルーマンによれば、コミュニケーションとは伝達、情報および理解からなる創発的なできごとであり、コミュニケーション過程は自己準拠的な過程であるという。ルーマンはこのことを論拠として、コミュニケーションを個々の行為に還元することはできないということを主張している。ルーマンはこうした手順をふむことによって、コミュニケーションというものの把握にかんして、一つの新しいパースペクティブを開示しているということができる。

そうしてみると次に、このパースペクティブからすると、コミュニケーションと行為とのかかわりがどのようにとらえなおされるのかが、問われることになる。もしかりに行為概念は社会システム理論にとって無用の存在と化しているという見解をルーマンが支持しているというのであれば、コミュニケーションは個々の行為には還元されえないということを示すだけで十分であり、コミュニケーションと行為とのかかわりがどうとらえられるかについては問う必要のないことだということもできるだろう。だが、ルーマンによれば、コミュニケーションばかりでなく行為もまた、社会システムの再生産にとって不可欠の要素だという⁽²⁴⁾。そうだとすれば、コミュニケーションと行

為とのかかわりが新たな見地からどのようにとらえなおされるのかこそが、明らかにされなければならない。ルーマンからすれば、こうした問いを立てそれについて考察することは、社会システムにとってそれ以上分解することのできない最終的要素はコミュニケーションなのかそれとも行為なのかの問いにこたえることに直結しており、さらには社会システムの諸要素はいかにして構成されるのかの問いを解明することにもつながっている⁽²⁵⁾。そこでここでは、こうした問いにかんするルーマンの思考の道筋をたどり、コミュニケーションと行為とのかかわりについて検討をすすめていくことにしたい。

さてルーマンは、コミュニケーションと行為とのかかわりを考察していくにあたって、確認しておくべき論点を列挙しそれらをひとつひとつ検討していくという手順をふんでいる。そこでわれわれもルーマンにしたがってこれらの論点を順をおって検討し、ルーマンの議論について理解を深めることにしたい。まず第1にルーマンは、この議論の出発点として確認しておかなければならない論点として、次のことをあげている。すなわち、コミュニケーションを行為としてとらえることはできないし、コミュニケーション過程を行為の連鎖としてとらえることはできない、ということである⁽²⁶⁾。すでにこれまでの検討で明らかにされているとおり、ルーマンからすれば、コミュニケーションを伝達の行為とみなすことはできないのであり、コミュニケーションは伝達、情報および理解という三つの選択の総合にほかならない。コミュニケーション過程を伝達以上の何ものかとみなさなければ、コミュニケーション過程を完全に把握することはできない。コミュニケーションというものにはつねに、伝達の選択性ばかりでなく、伝達されるものすなわち情報それじたいの選択性や、理解の選択性も含まれている。コミュニケーションとは、こうした三つの選択性からなる統一体にほかならないのだが、この統一体を可能ならしめているのはこの三つの選択性のあいだの差異なのであり、この差異こそが、コミュニケーションを成り立たせているのだという⁽²⁷⁾。

そうした出発点を確認したうえで、第2にルーマンは、社会システムを諸要素へと分解するとい

う問題を取りあげ、社会システムの諸要素への分解にコミュニケーションがどのようにかかわっているのかを主題としている⁽²⁸⁾。ルーマンによれば、社会システムはコミュニケーションによって構成されているのだが、そうした社会システムにおいて、社会システムを諸要素へと分解する手段としてはコミュニケーションしか用いることができないのだという。たとえばある陳述というものを取りあげてみると、その意味連関をたどり、より小さな意味の統一体を形成させ、分解をさらにすすめていくことができる。しかし、このことはまさしくコミュニケーションをとおしてのみ可能なのだという。こうしてルーマンは、社会システムの諸要素への分解はコミュニケーションをとおしてのみ可能だということを指摘するのだが、このことに関連して、社会システムにとってみればコミュニケーションという構成水準を下回ることにはできないということをつけくわえている。たしかにコミュニケーションは、さまざまな必要におうじて引き起こされうる分解のために利用することができる。それでは、そうしたコミュニケーションによって、コミュニケーションそれじたいを分解することはできるのだろうか。すでにみたとおり、コミュニケーションは伝達、情報および理解という三つの選択の総合にほかならないのだが、コミュニケーションのこうした統一体形成の形式が放棄されてしまえば、コミュニケーションのオペレーションそのものが終了してしまうことになる。こうしてみると、何らかの目的のためにコミュニケーションをより細かな要素へと分解することはたしかにできるけれども、そうした分解をおこなってしまえば、コミュニケーションはもはやコミュニケーションとして存立しえない。コミュニケーションのオペレーションを継続させるためには、コミュニケーションを分解することはできず、コミュニケーションという構成水準を下回ることにはできないというわけである。

さらに第3にルーマンは、これまで検討してきた論議の重要な帰結として、次の点を指摘している。すなわち、コミュニケーションは直接には観察されえないのであり、ただ推定されうるだけだというのである⁽²⁹⁾。この点にかんしていえば、コミュニケーションは自己準拠的にのみ成立するこ

とができ、そうした自己準拠的過程のなかでコミュニケーションの自己点検がおこなわれるとする論点が、想起されなければならない。すでにみたとおり、コミュニケーションの受け手による理解は、送り手による伝達と情報それじたいとの差異を識別しうることにともづいており、送り手は、そうした受け手の理解を予期して伝達をおこなっている。したがって、コミュニケーションそのものを考えてみたばあい、コミュニケーションはこれら三つの選択の総合としてしか存立しえないのだが、その過程のなかでコミュニケーションの送り手と受け手とがどのように行動しているのかを検討してみると、コミュニケーションの受け手は、送り手による伝達を伝達行為として受けとめ、そうした行為のなかから、受け手じしんがそれ以前に送り手にたいしておこなった伝達が理解されているかどうかを読みとろうとしている。そうしてみると、じっさいに観察されうるのは伝達という行為だけなのであり、コミュニケーションが理解されているかどうか、そうした伝達行為のなかから読みとるほかない。こうした観察にもとづくことによってのみ、コミュニケーションは運行するというわけである。ルーマンにいわせれば、コミュニケーション・システムを観察することができたり、あるいはコミュニケーション・システムがそれじしんを観察することができるためには、コミュニケーション・システムは行為システムとして示されなければならない、ということになる⁽³⁰⁾。

さらにルーマンは第4に、コミュニケーションと行為との関係について、次のような指摘をおこなっている。すでにみたとおり、コミュニケーションは伝達、情報および理解という三つの選択の総合としてのみ成り立っている。コミュニケーションをこのようにとらえるかぎり、コミュニケーションはそうした複数の選択のあいだの対称的な関係としてのみおさえられる。伝達、情報および理解という三つの選択は、それぞれ他の選択のいかにに依拠しあっており、それゆえコミュニケーションそれじたいのなかには、送り手による伝達から受け手による理解へとといったコミュニケーションの流れなどというものはみいだされない。コミュニケーションという事象のなかから行為とい

うものを読みとろうとするばあいにはじめて、コミュニケーションが非対称的なものとみなされるのであり、送り手による伝達から受け手による理解へとといった方向性がコミュニケーションのなかに読みとられることになる⁽³¹⁾。

コミュニケーションが対称的であるという事実は、先にのべた移転のメタファーによって覆い隠されている。そうしたメタファーにもとづけば、コミュニケーションは送り手から受け手へと向けられる非対称的な関係としてのみとらえられることになるからだ。しかし、ルーマンによれば、伝達、情報および理解という三種類の選択のそれぞれが他の選択を方向づけることができ、しかもそうした方向づけが一方向的ではなくつねに相互的になされている。だからこそコミュニケーションそれじたいは対称的なものとしてとらえられなければならないというのである。はたして何が理解されるのかという点は、たしかにコミュニケーションの成立にとってきわめて重要であり、この点こそがコミュニケーションにとっての隘路をなしているということもできる。そうしてみると、理解がうまく達成されるどうかは不確かだといわざるをえないのだが、理解がうまく達成されていないとみられるばあいには、ふたたび新たな情報が重要になり、ただちに伝達の必要が生じることになる。このようにコミュニケーションにおいては、伝達、情報および理解という三つの選択が密接に絡みあっている。いずれか一つの選択が特別に重要でその選択が他の選択を方向づけている、ということにはならないのだという。

これまで検討してきたルーマンの見解にしたがえば、コミュニケーションは行為から組み立てられているのでは決してないけれども、コミュニケーションそのものは観察されえず、じっさいに観察されるのは行為だけであり、しかもこうした観察はコミュニケーションが運行するためにも不可欠だということになる。そうしてみると、コミュニケーションの運行のためにも行為というものが構成されなければならない、ということになる。

ところでルーマンは、行為の構成ということにかんして、次の二つの点を指摘している。まず第1に行為というものは、ちょうど情報と伝達との区別に対応して、二つの相異なるコンテクストの

なかで社会的に構成されているという。すなわち、一つには情報ないしはコミュニケーションのテーマとして構成されているのであり、もう一つには、伝達行為として構成されているというのである⁽³²⁾。それじたいはコミュニケーションではない行為というものが、たしかに存在する。コミュニケーションは、そうした行為をもつばら情報としてのみ取り扱うにすぎない。コミュニケーション・システムは、行為についてコミュニケートすることができるし、もちろんそれ以外のことがらにかんしてもコミュニケートすることができる。ともあれこのようにして、行為はコミュニケーションのテーマないしは情報として構成される。他方において、コミュニケーション・システムは、伝達することそれじたいを行為として把握しなければならない。伝達することそれじたいを行為として把握することによってのみコミュニケーションは進行しうるのであり、その意味において行為は、コミュニケーション・システムが自己再生産するために不可欠の構成要素となっているのだという。こうした文脈においてルーマンは、コミュニケーション・システムが行為システムとして把握されるということはきわめて一面的なのだけれども、決して誤りではない、とのべている⁽³³⁾。社会システムはそのシステムそれじたいのなかで、その当のシステムそれじたいについての描写をおこない、社会システムの過程を進行させたり、社会システムの再生産を制御したりしている。社会システムのこうした自己観察 (Selbstbeobachtung) や自己描写 (Selbstbeschreibung) がおこなわれるために、コミュニケーションの対称性が非対称化することになる。つまり、そうした自己観察ないしは自己描写の目的のために、コミュニケーションのなかに行為というものが読みとられることになり、それによって伝達する人から伝達される人へといったコミュニケーションの流れが想定されることになる。社会システムが再生産されるためには、より単純化され、分かりやすい自己描写が必要とされるのであり、そのばあいにはコミュニケーションではなく行為が社会システムの最終的要素として役立つことになる⁽³⁴⁾。

ところで、行為の構成ということにかんする第2の点としてルーマンが指摘しているのは、それ

それぞれの行為は帰属 (Zurechnung) の過程によって構成されるということである。つまり、行為というものが成立しているのは、ある選択がそれぞれのシステムに、すなわち何らかの心理システムや社会システムに帰属されることによってだというのである⁽³⁵⁾。ルーマンは、ここでの行為概念の要点として、次の二つの点をあげている。すなわち、まず第1には、選択がシステムの環境にではなく当のシステムそれじたいに関係づけられているということであり、第2には、このことにもとづき、さらなるコミュニケーションにとっての受け手やさらなる行為のとの接点の接続点が確定されている、ということである⁽³⁶⁾。

ルーマンからすれば、あるできごとを行為として確定させるということにはすでに、何らかの単純化ないしは複合性の縮減が必要とされている。われわれの日常生活においては、行為を個々の具体的な人間に帰属させるということが通常おこなわれている。しかし、それはまさしく先入見にほかならない。ルーマンにいわせれば、もっぱら個々の具体的な人間にのみ行為を帰属させることができるというのは、非現実的な想定にほかならない。というのも、じっさいのところ行為は、個々の人間の過去によっては完全に決定されえないのであり、たいていのばあい行為の選択は、そのおかれている状況によって左右されているからだという。しかしそれにもかかわらず、日常世界においては、行為は諸個人に帰属されている。ルーマンによれば、こうした非現実的な想定がなされているのは、複合性の縮減が必要だということによってしか説明できないという⁽³⁷⁾。

さてここで、これまで検討してきたルーマンの見解をふまえて、社会システムの最終的な要素は何かという問いに立ちかえてみることにしよう。ルーマンからすると、社会システムの基底過程はあくまでもコミュニケーション過程であり、その意味において、コミュニケーションこそが社会システムを構成する要素とされなければならない。他方、そうしたコミュニケーション過程をコントロールしうするためにも社会システムは自己観察ないし自己記述を不可欠としており、そのためには行為を社会システムの要素として利用しなければならない。ルーマンにいわせれば、コミュニケー

ションは社会システムの自己構成の基礎的な統一体であり、行為は社会システムの自己観察と自己描写の基礎的な統一体なのだという⁽³⁸⁾。ルーマンからすれば、こうした意味あいにおいては、社会システムを行為システムとしてとらえることは一面的ではあれ誤りとはいえない。だが、社会システムが行為システムであると表現するばあい、とりたてて断らないかぎりには、行為という基礎的な要素がまず実在し、そうした要素が組み立てられて社会システムが構成されるとする思考法を前提としてしまうことになりかねない。ルーマンが拒否しようとしているのはまさしくこうした思考法なのであり、この点だけは決して見誤ってはならない。

4 むすびにかえて

これまでみてきたとおり、まずルーマンは、コミュニケーション過程は基底の自己準拠の過程としてのみ存立しうとし、コミュニケーションを個々の行為には還元しえないことを示している。さらにルーマンは、そうした見地から、社会システムを行為システムとしてとらえることは誤りとはいえないとしながらも、個々の行為がまず実在しそうした行為が組み立てられて社会が形成されるという見方については徹底的に否定している。こうしてルーマンは、社会システムを構成する要素としてコミュニケーションを考えるべきことを主張している。

これまでの検討によってわれわれは、ルーマンのコミュニケーション概念の基本的特徴を明らかにしようとしてきた。いうまでもなくこれだけの検討では、ルーマンのコミュニケーション理論の全容について解明しえたとはとてもいいがたい。コミュニケーションという多彩なりアリティにかんするルーマンの洞察はさらに広がり深まりをみせているのだが、そうした洞察については、この小稿では取りあげることができなかった。またコミュニケーションの理論をより実質的な社会理論のなかで生かしていくためにはコミュニケーション・メディアの理論を展開させることが不可欠なのだが、ルーマンが展開しようとしているコミュニケーション・メディアの理論がいかなるものであるのかについても、ここではまったく検討す

ることができなかった。コミュニケーションにかんするルーマンの洞察をその細部にまでわたって検討する作業については、別の機会にこころみることにしたい。ともあれここでは、これまでの検討をふまえ、ルーマンのコミュニケーション概念にみられるいくつかの重要な特徴について指摘しておくにとどめたい。ただしそのさい、ハーバマースのコミュニケーション行為概念との対比を視野に入れつつ、論をすすめていくことにしたい⁽³⁹⁾。もちろん、ルーマンのコミュニケーション概念とハーバマースのコミュニケーション行為概念はそれぞれの社会理論の構成を左右する重要な概念であり、それらを比較検討するという課題は別稿にゆずらなければならない⁽⁴⁰⁾。ここではあくまでも、ルーマンのコミュニケーション概念の特徴をきわだたせるといった目的のために、ハーバマースのコミュニケーション行為概念に論及することにしよう。

さてまず第1に、ルーマンのコミュニケーション概念の最大の特徴としてあげられるのが、送り手から受け手への情報の流れといった実体論的なコミュニケーション概念からの離脱を徹底的におしすすめているという点である。ルーマンは、移転メタファーにもとづくコミュニケーション把握をその根底から否定し、コミュニケーション過程は基底的自己準拠の過程としてのみ存立しうることを示している。まさしくこの点にこそルーマンのコミュニケーション概念の核心がみいだされるのであり、この点において、ハーバマースのコミュニケーション行為概念とその論理構造を大きく異にしているといえよう。というのもハーバマースは、あくまでも自我の行為と他我の行為はいかにして接続されうるかという水準で問題を立てているからである⁽⁴¹⁾。そうしてみると、ルーマンの観点からすれば、ハーバマースのコミュニケーション行為概念がどれほどウェーバー＝パーソンズ流の社会性を欠いた行為概念を突破し、社会的行為の理論化に成功していると評価しうるものであったとしても、行為概念を出発点とし、そうした行為が組み立てられて社会が形成されているとする発想法が保持されつづけているというその一点において、ウェーバー＝パーソンズ流の行為概念と同じ地平にとどまっているということになるだ

ろう⁽⁴²⁾。この点にかんしては、ルーマンとハーバマースのそれぞれのコミュニケーション観の根幹にかかわる論点だけに、より慎重に検討をおこなわなければならない。ただし、ハーバマースのコミュニケーション行為概念のなかに前提とされているコミュニケーション観を実体論的なものと安易にかたづけしてしまうとすれば、それは公平な評価だとはいえないだろう。ハーバマースは、複数の行為者間で言語行為が営まれる状況を念頭においてコミュニケーション行為の概念を構想しており、少なくとも移転メタファーにもとづくコミュニケーション把握をこえた地平でコミュニケーションの理論化をはかっているとみることができるからである。むしろ、コミュニケーションをどう理論化するのかの問題こそが社会理論の構成のあり方を左右する重大な問題であることをルーマンもハーバマースもともに認識しながら、それをどのような方途でなしとげるべきかという点において両者が対立しているとみなければならない。ルーマンが自己準拠的システム理論の立場から理論化をすすめるのになんといし、ハーバマースは言語行為論を手がかりとしながら、あくまでも行為理論を出発点とすべきことを主張する。こうしてみると、この論点は、ルーマンとハーバマースのそれぞれが構想する社会理論の全体像と関連づけながら検討していく必要があるだろう。

第2に、ルーマンのコミュニケーション概念においては、コミュニケーションはあくまでも伝達、情報および理解という三つの選択の総合としてのみとらえられるのであって、コミュニケーションの受容や拒否は、コミュニケーションというできごとの一部ではないとされている。ルーマンからすれば、コミュニケーションの受容や拒否は、コミュニケーションに接続する行為なのである⁽⁴³⁾。この点においても、ハーバマースのコミュニケーション行為とその発想法を異にしている。ハーバマースのコミュニケーション行為においては、話し手が妥当性要求 (Geltungsanspruch) を呈示しそれを聞き手が承認したり批判したりすることが重要な契機とされている。つまり、コミュニケーション行為概念においては、話し手が呈示した妥当性要求を聞き手が承認するか批判するかといった一連の局面において分析がおこなわれているわ

けである⁽⁴⁴⁾。

さらに第3の点として、ハーバマースのコミュニケーション行為概念と比較してみると、再帰的コミュニケーションにかんする位置づけに大きな違いがみられる。ルーマンのコミュニケーション概念においては、理解が達成されていないことがコミュニケーション過程のなかで読みとられるばかり、理解を達成するためにコミュニケーションにかんするコミュニケーションをおこなうということが想定されている。ルーマンにおいては、基本的にはもっぱら理解のレヴェルでの再帰的コミュニケーションが念頭におかれているといえよう⁽⁴⁵⁾。これにたいしてハーバマースのコミュニケーション行為においては、そこで呈示されている妥当性要求が話し手と聞き手の両者によって相互承認されないばかりに、コミュニケーション行為のレヴェルから討議のレヴェルへと移行することが想定されている。つまり、コミュニケーション行為においては、潜在的にであれ真理性や正当性や誠実性の要求が掲げられているのであり、そうした要求に異議がさしはさまれたばかり、そうした要求の妥当性そのものを主題とした討議がおこなわれるというわけである。さらにいえば、討議へのそうした移行が潜在的にはいつでも可能だという点こそが、コミュニケーション行為が成立しうするための重要な条件とされている。そうしてみると、ハーバマースの理論構成においてはそうした再帰的コミュニケーションが重要な位置をしめているといえるのであり、ルーマンの理論構成において再帰的コミュニケーションがそうした特別な位置づけを与えられていないのと比べてきわめて対照的である⁽⁴⁶⁾。

ルーマンとハーバマースのコミュニケーション観の類似点と相違点を見定める作業は、さらに稿をあらためて続けなければならないけれども、ここでは第4の点として、重要な論点をもう一つだけ指摘しておくことにしよう。すなわち、ルーマンはコミュニケーションを考える前提としてダブル・コンティンジェンシー(doppelte Kontingenzen)の問題を重視している、ということである⁽⁴⁷⁾。ダブル・コンティンジェンシーの関係にある自我と他我は、それぞれ相手をいわばブラック・ボックスとみなしている。ルーマンの観点からすれば、

こうしたダブル・コンティンジェンシーの関係こそが自我-他我関係の原点であり、そうした関係にある諸個人のあいだでいかにしてコミュニケーションがおこなわれるのかこそが問題にされなければならない⁽⁴⁸⁾。これにたいしてハーバマースは、ダブル・コンティンジェンシーの関係を自我-他我関係の原点であるとする想定それじたいを受け入れてはいない⁽⁴⁹⁾。したがってこの点こそが、ルーマンとハーバマースのコミュニケーション観のそれぞれを特徴づける決定的な相違点だといえることができるだろう。しかもこの点には、たんにコミュニケーション観の違いにとどまらず、その根底に位置する人間観や言語観の違いがあらわれているとみなしなければならない。そうしてみると、ルーマンとハーバマースのそれぞれの人間観や言語観と関連づけて、それぞれのコミュニケーション理論についての検討を深めていくことが必要となるだろう⁽⁵⁰⁾。

ともあれ、コミュニケーション概念をどのように設定するのかによって「社会理論のコミュニケーション理論的転回」をどのような方向に向けてすすめていくかが左右されることになるからには、コミュニケーション概念は重なりあう次の二つのレヴェルで検討されなければならないだろう。すなわち、まず第1には、それぞれのコミュニケーション概念がコミュニケーションの現実相をどれほど理論化できているのかという水準であり、第2には、そうしたコミュニケーション概念が社会理論の基礎概念としてどれほど有効なのかという水準である。ここで強調しておきたいのは、ルーマンやハーバマースのコミュニケーション把握を検討するにあたっては、いまのべた第2の水準での検討を忘れてはならないということである。ルーマンのばあいでもハーバマースのばあいでも、コミュニケーション概念は社会理論の構成のあり方を大きく方向づけている。そうしてみると、それぞれの社会理論にとってコミュニケーション概念がいかなる役割をはたしているのかを確定したうえで、社会理論の基礎概念としてそれぞれのコミュニケーション概念はどれほど適切なのかを検討されなければならない。現代社会にかんする社会理論の構築にとっていかなるコミュニケーション概念が適切なのかという観点からルーマンとハ

ハーバースのコミュニケーション概念について検討を深め、さらにはそれらを比較していくといった作業が不可欠だといえよう。

(ながい あきら 講師)

(1992. 1. 8 受理)

註

- (1) J. Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bd. I, Frankfurt am Main, 1981, S. 369-452. 藤沢他訳『コミュニケーション的行為の理論』(中)、未来社、1986年、7-93頁。
 - (2) N. Luhmann, *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main, 1984, S. 191-241. (以下SSと略記)。
 - (3) いわゆるハーバース=ルーマンの論争の内容については、1971年に『社会の理論か、それとも社会工学か』という表題の書物として刊行されている(J. Habermas und N. Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie—Was leistet die Systemforschung?* Frankfurt am Main, 1971. 佐藤・山口・藤沢訳『批判理論とシステム理論—ハーバース=ルーマン論争』(上)、(下)、木鐸社、1984年、1987年)。しかしこの書物を読むかぎり、両者ともきわめて誠実に論議しようとしているにもかかわらず、論争としてみるとすれちがいに終わっているという印象を抱かざるをえない。このように論争がかみあわないままであったという原因の一つとしては、その当時はまだ、ルーマンもハーバースもみずからの社会理論を練りあげていく途上にあったという事情をあげておかなければならない。それからおよそ10年のちの1981年にハーバースが『コミュニケーション行為の理論』を公刊し、それに引きつづいて1984年にはルーマンが『社会システム』を公刊した。この2冊の大著はそれぞれの理論的主著とでもいうべき書物であり、これらの著作によってわれわれは、ルーマンとハーバースそれぞれの社会理論の基本的枠組について系統的に知ることができるようになった。そうしてみると、ようやくこの段階になってはじめて、ハーバース=ルーマン論争が実質的にくりひろげられる準備が整ったともいえよう。
- もし現時点においてハーバース=ルーマン論争がおこなわれるとしたら、その焦点の一つとなるのがコミュニケーションの概念だと考えられる。な

おルーマンじしんも、1988年に来日したさいのインタヴューのなかでハーバース=ルーマン論争について言及し、もしもハーバース=ルーマン論争をくりひろげるとしたらコミュニケーション概念がそうした理論的係争点になるにちがいないという趣旨の発言をおこなっている(河上倫逸編『社会システム論と法の歴史と現在』未来社、1991年、328-330頁)。

- (4) 本稿では、『社会システム』の第4章「コミュニケーションと行為」に依拠して、ルーマンのコミュニケーション概念について検討をすすめていくことにする。
- (5) SS, S. 192.
- (6) SS, S. 192.
- (7) ルーマンは、まさしくこの観点からウェーバーやパーソンズの行為概念を問題視している(Vgl. SS, S. 191, 240.)。
- (8) SS, S. 227.
- (9) SS, S. 193.
- (10) SS, S. 193.
- (11) SS, S. 193f.
- (12) SS, S. 194.
- (13) SS, S. 194.
- (14) SS, S. 194. なおここでルーマンは、こうした指示の地平はコミュニケーションそれじたいによってはじめて構成されたものだとのべている。つまり、あらかじめ指示の地平が与えられ、そのなかからあるものを選択するというふうに考えてはならないというのである。
- (15) SS, S. 194.
- (16) SS, S. 194.
- (17) SS, S. 195.
- (18) SS, S. 198.
- (19) SS, S. 198.
- (20) SS, S. 198.
- (21) SS, S. 199.
- (22) SS, S. 199.
- (23) ただし、送り手の側に伝達しようとする意図はなくてもコミュニケーションは成立しうるばあいがある。つまり、情報と伝達との差異を受け手の側で観察することに成功したばあいは、コミュニケーションが成立したことになる。そうしてみると、送り手の側で、受け手の理解を予期して伝達をおこなわ

なくてもコミュニケーションは成立しうるということになる。したがって、送り手の側の予期はコミュニケーションが成立するための必要不可欠の要因ではない (Vgl. S S, S. 208f.)。

- (24) S S, S. 233.
- (25) S S, S. 225.
- (26) S S, S. 225.
- (27) S S, S. 225f.
- (28) S S, S. 226.
- (29) S S, S. 226.
- (30) S S, S. 226.
- (31) S S, S. 226.
- (32) S S, S. 227.
- (33) S S, S. 227.
- (34) S S, S. 227f.
- (35) S S, S. 228.
- (36) S S, S. 228.
- (37) S S, S. 229.
- (38) S S, S. 241.
- (39) J. Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, I, S. 369-452. 邦訳 (中)、7-93頁。
- (40) なお、ハーバマースの社会理論においてコミュニケーション行為概念がいかなる役割をはたしているのかについては、拙稿「コミュニケーション行為理論の戦略的課題」『社会学研究』第53号、東北社会学研究会、1988年、を参照されたい。
- (41) J. Habermas, "Erläuterungen zum Begriff des kommunikativen Handelns", in *Vorstudien und Ergänzungen zum Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main, 1984, S. 571.
- (42) ヒーブルマンは、ウェーバーやパーソンズの行為概念のあり方を問題視したその文脈において、社会システムは行為から成り立つのかそれともコミュニケーションから成り立つのかの問いにたいし、コミュニケーション行為に焦点をあわせることによって単純にかつ性急にこたえようとする誘惑にうちかつことを学ばなければならないとのべている (S S, S. 192.)。そうしてみるとルーマンは、ハーバマースの名前をあげていないとはいえ、ハー

バマースのコミュニケーション行為の概念をウェーバーやパーソンズの行為概念の延長線上に位置づけ、批判しているとみることができる。

- (43) S S, S. 203f.
- (44) J. Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, I, S. 397-410. 邦訳 (中)、34-46頁。
- (45) S S, S. 199.
- (46) いうまでもなくわれわれは、再帰的コミュニケーションがルーマンのコミュニケーション理論において十分に取りあつかわれていないなどと主張しているのではない。むしろ、現実生活のなかで営まれる多彩な再帰的コミュニケーションを扱う理論的可能性を、ルーマンのコミュニケーション理論のなかに求めることもできるように思われる (Vgl. S S, S. 210f.)。ただここでは、次のことを指摘しているにすぎない。すなわち、ハーバマースの理論構成においては「討議」という再帰的コミュニケーションが特別な位置づけを与えられているのだが、ルーマン理論において再帰的コミュニケーションはそうした位置を占めていない、ということである。
- (47) Vgl. S S, S. 148-190.
- (48) ダブル・コンティンジェンシーの問題と関連づけてルーマンのコミュニケーション理論を検討している論考として、次のものを参照。佐久間政広「社会システムのオートポイエシスとコミュニケーション」『社会学研究』第56号、東北社会学研究会、1990年。
- (49) 中岡成文氏もまた、ダブル・コンティンジェンシーの状況がハーバマースの視野の外にあると指摘している (『コミュニケーションの戦略』『現代哲学の冒険 14 浮遊する意味』岩波書店、1990年、96-97頁)。
- (50) ハーバマースの側からのルーマン理論へのコメントとしては、さしあたり次のものを参照されたい。J. Habermas, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main, 1985, S. 426-445. 三島他訳『近代の哲学的ディスクール』II、岩波書店、1990年、627-652頁。